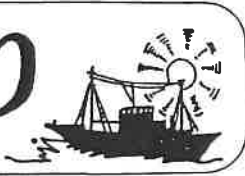


# 福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財)第五福竜丸平和協会  
〒136 東京都江東区 夢の島3-2  
都立第五福竜丸展示館内  
電話 03-3521-8494

私にとっての平和運動は、やはり第五福竜丸から始まったという思いが強い。東京都地域婦人団体連盟(東京地婦連)の事務局に入ったのは一九四九年、その時は敗戦後の就職難からとありあえずは腰掛けのつもりだった。それが五年の全国地域婦人団体連絡協議会(全地婦連)の結成を迎えて事務局を兼務、五四年のビキニ環礁水爆実験による死の灰事件に出会う。

放射能汚染のマグロは食べられない。汚染魚はすべて地中に埋められたと報道されたが、恐怖心から魚の売れ行きは止まり、魚屋も主婦も悲鳴を上げた。四月末、全地婦連は当時の核保有国の米、英大使館とソ連代表部に提出した要望書で「第五福竜丸の漁師たちは、あらゆる治療を受けながらも、放射能に触まれた身体は助かる保証は与えられていません。私たちの受けた犠牲が将来世界のいかなる国にも繰り返され

## 地域活動のネットワークの中へ

田中里子

ではならないと堅く決意しました」と、原子兵器の製造、実験、使用の禁止を訴えた。人間の生きる権利を、人間が奪うことへの怒り、これが三千二百万におよぶ原水爆禁止署名運動を巻き起こし、翌五年八月広島で第一回原水爆禁止世界大会を開催させる原動力になった。私は、自分の生きがい在地婦連の場に見出すことができた。

あれから四十二年の歳月が経った。比較的世界で合意が得られ易いと思われる核実験禁止さえ未だに実現していない始末である。中国やフランスの核実験は今年に入っても続けられ、私たちの長年にわたる願いも空しく、実験による被害者は後を絶たない。世界は冷戦から抜け出したものの局地戦争は止むことがない。平和運動の役割は終るところがますます高まっているのに、多くの市民を巻き込んだ原水禁運動は分裂を繰り返して、運動の中核を自負し

ていた地婦連もその勢いを失った。私自身も消費者、女性、高齢者問題に追われ、いずれも人間の生きる権利、それは平和をつくるものと主張するが、およそ迫力がない。

そうした中で昨秋、東京で開いた第四三回全国地域婦人団体研究大会では「戦後五〇年、二一世紀に伝えたい私たちの活動」を中心テーマに、分科会の一つには「平和をつくる」を設け、第五福竜丸平和協会の川崎昭一郎会長を助言者にお願した。

ちょうど沖縄の米兵による少女暴行事件の直後だけに、沖縄県婦人連合会からの発言は全参加者を動かし「米軍基地の早期撤去と日米安保条約ならびに地位協定を根本から見直す」ことを明記した特別決議を満場一致で採択した。

地婦連の歴史の中で、安保見直しを明記した文書は全くない。地域からの運動に根ざした発言の重みに目を見張る思いがした。加えて「沖縄を一人にさせない」という連帯意識である。人権と平和をめざす地域活動のネットワークが平和運動を蘇らせるのであるか。

(東京都地域婦人団体連盟常任委員)



第五福竜丸



第五福竜丸

展示館開館二十周年を祝う——展示館拡充へ意欲

六月十日、「第五福竜丸展示館二十周年を祝う会」が東京都庁議事堂レストラン二幸で午後六時から開かれ、東京都の関係部局担当者をはじめ、ひろく展示館に連なる方々や、協会役員など、六十人が出席しました。

「祝う会」は、杉重彦協理理事の司会ですすめられ、青島幸男都知事のメッセージが紹介されたあと、猿橋勝子理事、和泉伸一評議員、川崎昭一郎会長が、それぞれ、ビキニ事件と展示館計画、展示館建設、開館からの二十年と今後の抱負について報告をおこないました。

来賓の南部公園緑地事務所長の須々木巨平氏はあいさつのなかで展示館の拡充にふれ、協会の要望に沿うよう努力したいと述べました。

第五福竜丸に会いにゆこう

六月二十二日、山梨県立女子短期大学一年生50名が展示館を訪問、二時間にわたって熱心に研修を重ねました。大学の共通教育科目の「基礎演習」の一環で、歴史の追体験をテーマにした研修旅行。今年には「第五福竜丸に会いにゆこう」と企画されました。展示館では乗

た。

懇談のなかでのスピーチは、それぞれ展示館の歩みをふりかえり、今後を期待する言葉で結ばれました。本多喜美副会長が閉会のあいさつを述べました。

山梨県立女子短大研修旅行

組員の大石又七氏、保存運動に尽力した江藤勇一郎氏から直接体験を聞き、八つのテーマで「分担研究」、船の内部も大石さんに案内されて入り「すごい体験」をしました。

見学のあとは、東京築地の中央卸売市場に移動、組合員の案内で

福竜丸の原爆マグロを埋めたという地点も調査し、市場の講堂で、事件当時マグロを取り扱っていた野末誠氏、杉並での原水爆禁止署名運動に参加した小澤清子さんから今につながる話を聞き、すずめられている史跡保存の運動についても討議しました。その日は東京晴海の海員会館に宿泊して学習するという「ビキニ事件の集大成」ともいべき企画(担当の米田佐代子教授)でした。

\* 六月の来館者数  
一九、〇二六名、82団体

記念ポスター完成

第五福竜丸展示館20周年を記念するポスターができました。

写真は英伸三氏。A1版二枚、A2版一枚の三種類、モノクロ印刷で、船を見つめる女子中学生、船腹の荒々しい外板とスクリュー、流れるような曲線を描く船尾とそれぞれ印象的です。「原水爆のない未来へ——第五福竜丸」のメッセージだけが簡潔に記されました。六千枚印刷され、学校、新聞社などに送られ、展示館で普及中です。

核兵器と科学者

連載 19

第一回会議の成果と意義

——パグウォッシュ会議の発足と発展(2)——

小川 岩 雄

一九五七年七月、ラッセル・アインシュタイン宣言の呼びかけに応じて、二年後に実現した第一回パグウォッシュ会議は、少なくとも三点で注目すべき成果を収め、歴史的に意義深い会議となった。

第一に、この会議はきびしい冷戦の下で東西間の対話の突破口を開き、相互信頼と和解の可能性を示すことができた。第二に、核エネルギーの大規模な軍事的・平和的利用に伴う核放射線の危険性の包括的・客観的な評価について、立場の異なる国々からの参加者が一致した判断に到達できた。第三は、こうした成果を通じて、参加者たちが自国内で育ててきた科学者の社会的責任と独自の役割の自覚を、国境を越えた核時代の普遍的モラルとして確認し、共有することができた。

まず対話の成功については、価値観や社会体制、被爆体験の有無などが異なる国からの参加者が、その多くは初対面だったにも関わ

らず、放射線障害のような科学的な問題ばかりでなく、軍縮問題のように激しい論争の的である高度の政治的課題についてまで、その解決のための基本原則や具体的提言を含む声明を、ほとんど全員一致で採択できたことは、驚くべき成果と言わなければならない。

実際最初には放射線障害のような技術的な問題でさえ、参加者の間でかなりの見解の違いがあるように見えたが、間もなくその多くは観念の違いによる見かけの相違に過ぎないことが分かった。科学者の間では、筋の通った批判は自説や面子にこだわらず、冷静に受け入れる習慣が早くから確立しており、とくにパグウォッシュ会議では、参加者はあくまでも個人の立場で参加し、「自分自身以外の何者も代表しない」という原則を貫いた結果、議論での不毛な対立はすべて賢明に避けることができた。冷静な議論と個人参加の二大原則はその後「パグウォッシュ

精神」と呼ばれ、この会議の貴重な伝統として現在まで継承されている。もっとも中には容易に一致した結論が出せない問題もあったが、その場合一致点と不一致点を整理することで相互の理解を深め合うことができた。

しかし討論をこれほど実りの多いものにするのができたより根本的な背景は、核兵器を自分たちが生み出したか、またはその脅威の一端を目のあたりにした科学者たちの強烈な社会的責任感と、人類の破滅を憂える深刻な危機意識であり、同じ不安に脅かされている全世界の人々の切実な関心であったと見るべきではなからうか。

会議の成功は核時代の激流の中で「生まれるべくして生まれた」英知の産物だったのではないか。次に放射線障害については、最新の研究と日本を始め各国での詳細な調査に基づいて、簡潔ながら視野が広く含蓄の深い専門委員会の報告書が承認され、ラッセル・アインシュタイン宣言の中心的要請に答えることができた。

重要な収穫としては、例えば、(1) 米ソ英などが続けてきた核実験による放射性降下物(「死の灰」)の地表蓄積量の推定値が、米英ソ日でよく一致することが分かった。(2) 広島・長崎での白血病などの発病率の統計などに基いて、身体的障害でも遺伝的障害と同様に、低線量でも発病率が線量に比例する可能性を認め、この仮説の下で初めて核実験や核戦争、さらにはX線診断や原発などでの被害者数の定量的予想と相互比較を試みる事ができた。(3) 予想される被害者の総数とともに、それが被曝には無関係な「通常の」発病者の何%に当るかも示し、数字の大小の判断を助ける配慮がなされた。

会議の予想以上の成功は、核時代の科学者の独自の役割と能力を実証し、参加者を大いに勇気付けしたが、会議は核軍縮の具体的な進め方などについては何の合意も得られなかった。こうした積み残しの課題と粘り強く取り組んでいくために、ラッセルを長とする継統委員会が設置された。

(立教大学名誉教授・協会理事) 前号(連載18)3段4行目に誤植がありました。「景気」→「景色」です。お詫びして訂正します。

ネバダ核廃絶サミットに参加して

石浜 明子

去る四月一日から四日までアメリカ・ネバダ州のラスベガス大学で核廃絶サミットが開かれました。つづいてネバダ核実験場の閉鎖を求める行動がおこなわれ、私は原水協代表団の一人として被爆者の方々とも一緒に参加しました。

このサミットは、米国内の二〇以上の草の根の反核・平和団体の呼びかけで集まったものです。おもな団体は、ワシントンのヒロシマ・ナガサキ委員会、プロボジション・ワン、全米ネットのピース・アクション、マンハッタンプロジェクト、セイン・フリーズ・ハワイ・

ネバダ先住民のシユンダハイ・ネットワーク、婦人国際平和自由連盟、平和のための女性の力などです。今回のサミット参加でアメリカの、そして世界の平和運動の変化を強く感じました。それは、「核廃絶」を共通の課題とするネットワークがつけられたことであらわれています。

以前は、日本の平和運動に対して核兵器廃絶を前面にかかげることを「理想論」とか「現実的ではない」との声もきかれましたが、今は核兵器廃絶で一致しています。原水協禁止世界大会を中心に四



ネバダ核実験場に入る

「核の鎖を断つ」の核廃絶サミットは、女性が前面に

〇年以上もつづけてきた私たちの草の根の運動が、ねばりづよい「核兵器廃絶のアピール署名」運動が、大きな共感を生みだしていると実感できました。

スローガンで、「ウエスタン・シヨロニーのお祈りでオープニング」：ネバダ核実験場に土地を奪われ、「聖なる大地」を核実験で汚された人々、ウラニウム鉱山で被爆したナバホ族、コロラド川の核廃棄物投棄で土地を汚染されたマハビ族、「太平洋の島の先住民は海によってへだてられているのではなく、海によってつながっている。その太平洋が核実験で汚染されている」と訴えたハワイの先住民など、犠牲になつている先住民の人權を考えられました。

少党派で、ロビー活動が中心と聞いていましたが、「草の根の世論作り」「地球規模で考え、地域に根ざした運動」とか「教育や福祉の要求と、それを妨げている軍拡を結びつけて平和の世論作り」といった発言は運動の変化と発展の可能性を感じました。

(新日本婦人の会静岡県本部・静岡県原水協副理事長)